

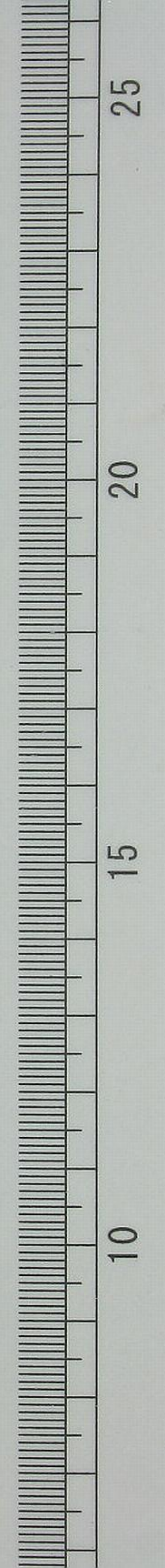
孝貞
節烈

近世名婦傳

岡田霞船編

上

柳田文庫
文庫11
A1700
1



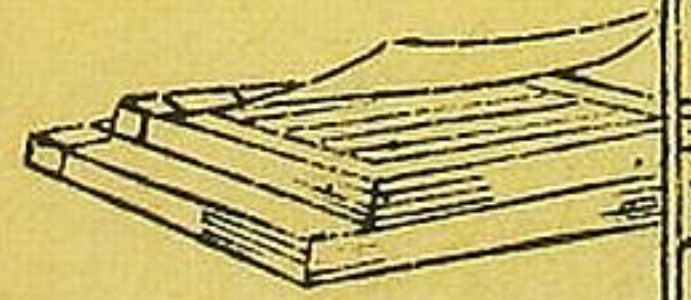
岡田霞船編
伊藤静齋畫

孝貞 節烈
近世名婦傳

初輯全

文庫 11
A 1700
1

○東京 聚榮堂梓



<48-8384>

孝貞 節烈 近世名婦傳自序

往古より孝貞節烈の婦人と奉んぬ和漢與不棟と充て汗
牛ふも尚餘りあるべし若し是を奉るも世遠く事久し
けむる作為の文あんにの疑ひを免む難し今茲に采録する
傳記の如きは書肆聚榮堂主人の囑托よりて嘉永以來の
節婦烈女の畧傳と記さるるも江湖の諸彦の目撃耳聴せし者
なれば毫も妄談怪説不渉るべくその實際を探訂し輯蒐し
頼婦奸女の警めあむあんと個の小冊子を以て婦人一代
の鑑とあさんとい

明治庚辰初冬

岡田霞船記





官女長橋村岡

山乃多は
常とのかやい
花しうらけ
同ふかきわ



内親王和宮

君は為民を先
おむす
むすの
清くた

木戸公妻

花子



毛名も中少主
誰もあはれ侍
中一人不儀
認英雄

桂葉生

藤原筆



野村於光傳

筑前福岡の藩士なる浦賀勝幸の女小一
幼き時より父母の教を守り平常
家中の娘が物見遊山に
誘引とも毎も品よく
言做て父母の手元にて孝
道を尽すを以て其身の樂みとする
のころ夜毎小文道を学び或る歌学小心を碎きに
時も怠る事のなけれど父勝幸も其意に感ず能
師を撰んで学ばせ一書を聞て八十を知る
性質也十三歳の頃小家中の人々争ひて書を求むる也



多一とか然る小光陰矢の如くお元ハ二ハの春を向へ綻びかゝる
 室の梅薫りもろ一き花の顔さく散ん風情なり
 然バ家中の若者が我れもくと単ひ妻小貫ん
 と言込族の多けれ共父母素よりお元ふも夫と
 頼むべき益量のなけれ何れも品能断り置か
 二十四歳の時同藩の士野村貞貫小嫁一
 夫婦むつま一暮せ一が貞貫病の
 為小致居一俱小山野の風景を樂み
 あり一が夫死す是より剃髪一て名を
 望東と改め歌道を以て諸國を遊歴一普く
 天下の豪傑と交る此際
 徳川家の威権檀あるふ

高松を
 別墅小匿一
 日夜自か
 心を附て
 在り一が此
 際福岡藩
 内乱起り
 正義の武
 士二十余人
 殺すの
 望
 東儀も



より諸藩の士諸々小集り
 軍議を催ふす
 其中小長
 藩の士高松
 春風ハ難を
 避て福岡小
 至れバ
 女なが
 も義氣
 金鉄の望東な
 れバ密々小◇

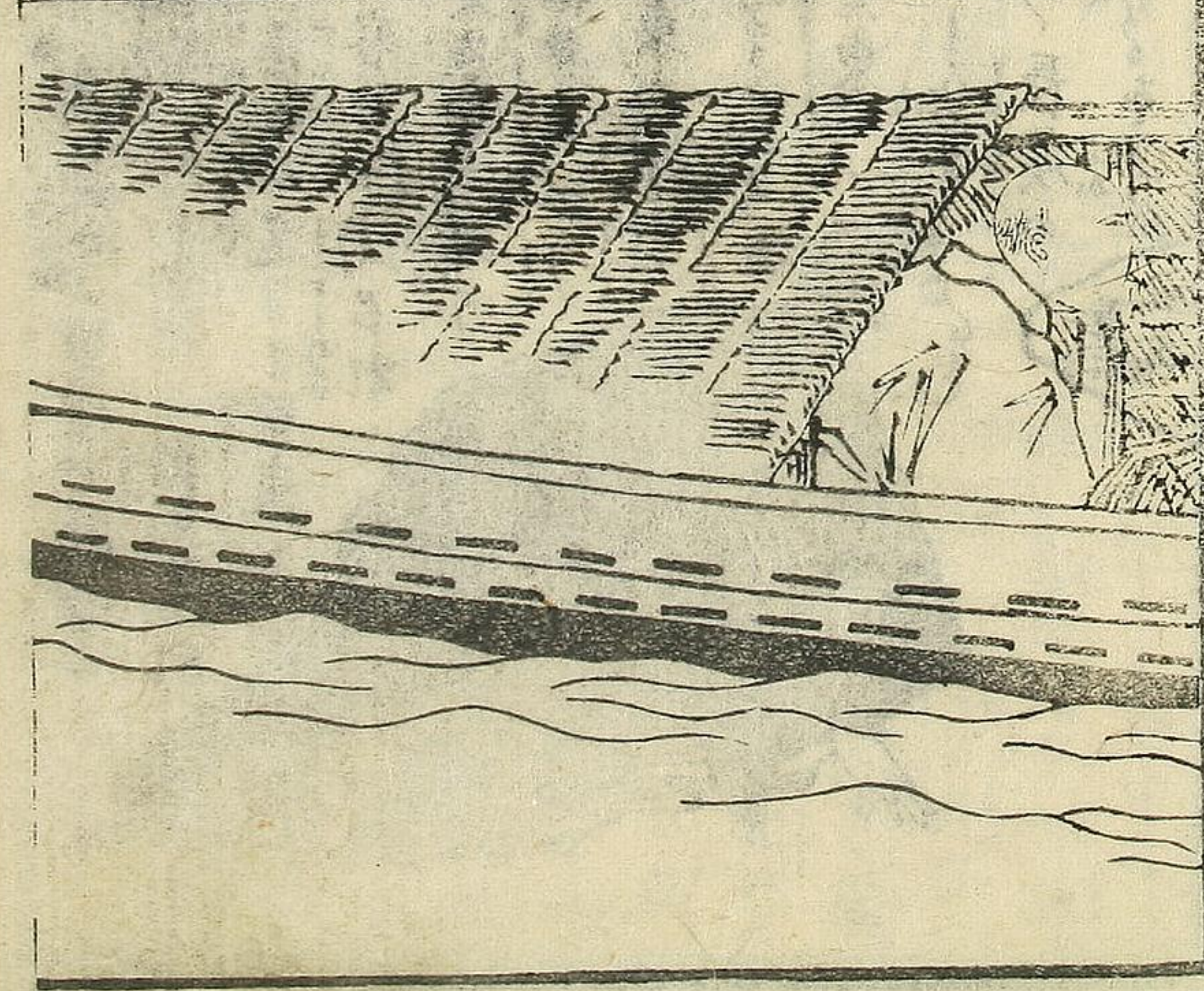
和名抄
 古事記

流され暗き獄
 舎小繋かれれ
 ども聊義心
 を挫かさり一と
 是より先小高
 松ハ野村望東
 が情け小よりマ
 危ふ命も漸く
 遁れ本國小歸りて在り

屢々奸徒を
 匿一たり神
 同國の姫寫小
 流され暗き獄
 舎小繋かれれ
 ども聊義心
 を挫かさり一と
 是より先小高
 松ハ野村望東
 が情け小よりマ
 危ふ命も漸く
 遁れ本國小歸りて在り



望東を救ひ出—
 途中小待受たる高秋ハ
 準備の駕籠小望東
 を乗移せ我家を
 急がせて頼ての
 事小乗物が我家に着
 が否や自かトキを採り
 て設けの一室小望東を
 匿—数多の侍女を
 附て日々饗應をそ
 す—望東小於ても



一かお望東が身
 の上を聞よりも
 多田藤四郎ト
 小申附如何ハ
 もち—救ひ
 出—先の恩儀
 小報せんと種々
 協議を致せ—
 后或る夜暗夜
 小紛れ小舟を
 浮べ厩かに姫真小
 押渡り獄舎を破り



高松が切なる志しを
 歎びあししが春風小
 於て福岡へ聞へん事を
 畏れ種々小心を碎々
 望東が身の上を守り
 て居し裡小獄舎小於
 て濕氣を受へが茲小
 祭せし者らあち望
 東ハ全身小痛みを
 生ト夫より漸次小

仍の太守ハ望東が病ひ小
 罹りたるを深く歎かせしれ
 良医を遣りて望東
 容解を聞召れ
 又衣類を贈り
 糖菓を遣り
 望東が心を慰
 めたまふ小
 り望東ハ
 うれ涙を
 流しつ長庚の
 寛仁なるを深く

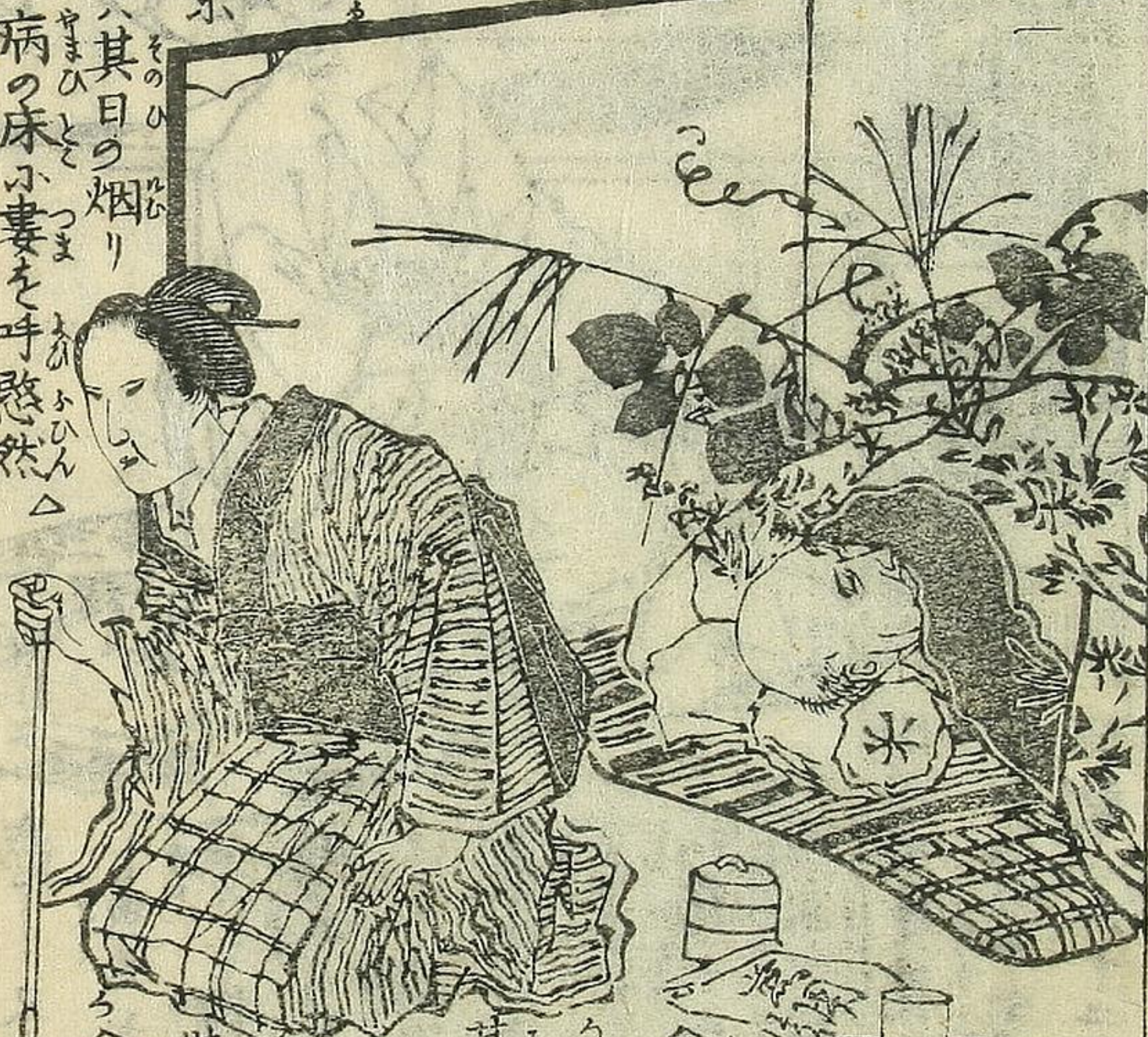


病ひの重り
 りれハ高松ハ傍ら
 不在りて看護小怠
 リなく名医を撰ひ
 良薬を用ひ
 て全快を
 祈りりるか
 此際長

感一又病中なり
 と魚ハ天下の形
 勢を論ト或ハ
 將來の見込を議
 して病床の樂みと
 ちるせハ漸次小病
 の重りはれハ高松を呼
 びて我意中を物語り
 尚明言を残りて死す
 此時慶應の三年十
 一月の中旬小望
 東ハ六十二歳なり

娼妓喜遊傳

泥中の蓮濁り小深す
と古語小憚りぬ婦
人といふ今を去る
二十八年の以前小
江戸皆川町小太田正
庵といふ者あり医業
を以て一時栄華を極
も續く不幸の其上小
和て加へて長の大病今其日の烟り
と立行かざる正庵の病の床小妻を呼啓然



ちうも
娘をバ
質入な
て今
貧苦を凌
ぐんと思
其方の心
如何小を
是と云の
僅の中裁
全快致
たよバ

又受度す手段もあんと茲小夫婦の相談整ひ娘を呼て父母が涙まがし小娘小向
ひ暫時の間遊女屋へ奉公爲してと云さる物も張裂正庵夫
斯く小兩親が續く不幸小當時の病氣
無慈悲な親と諦め行て具るも親
の爲仮令居所小離れても又此母が折々ハ
尋ねて行を樂み小娘よ爰を聞分て能く温
荒元爾笑ひ母様案より下さる私や何処でも行程は疾く父さんの御病
氣を平愈して下て下まひと年に似合ぬ娘が心母の聞より抱き上年葉も行
ぬ身を以て能得心をよつたと云詞さへ口曇りて後ハ親子が泣はくり此
体を視て正庵も思ひ知らば這出い決り置を浸しるが斯くあ
る可き事なぬ兼て約束せし如く吉原二丁目甲子樓小遣りハ喜永
六年の夏ふしと此時僅かたハ戈なり又正庵夫婦ハ其翌年死去せし



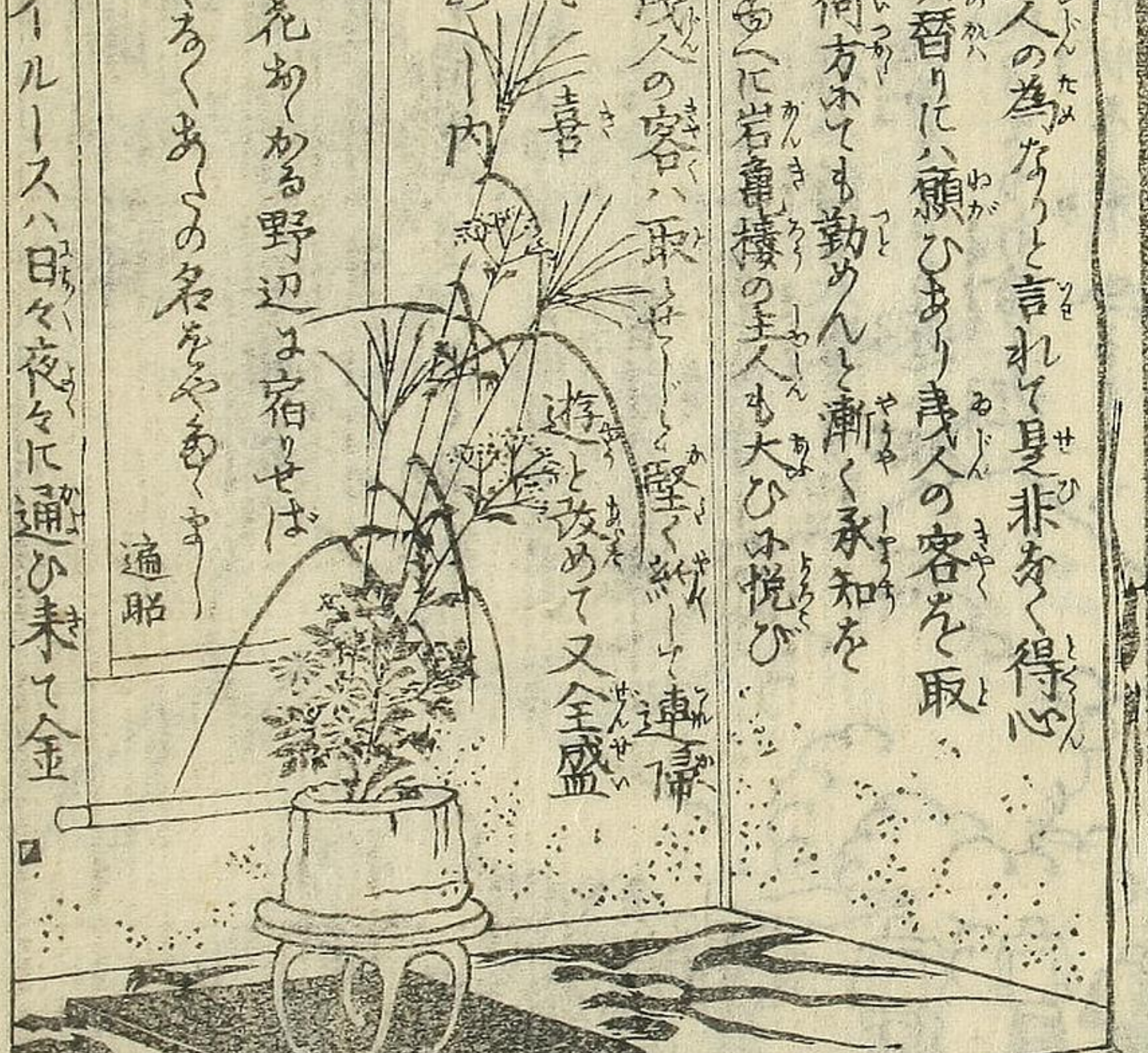
勤めて
と諭す
婦あれ
娘小向

由良 其後 八甲子 樓に 養 育な 諸 藝を 仕込て十五の春始 客を取するに付て子の 日と叫せしが容貌とら 藝までも衆み越へ たる娼妓也其突出の當日か全盛言ん方



くも横濱の岩亀樓 此のな 事疾 聞住替さ せよと談せ 一に否み難 事故在て 子の日に 斯と云渡 夢かと計り打 驚き再 三再四否め共

是も主人の為なりと言れは是非を得心 なく其替りに願ひあり夷人の客を取 せず何方へも勤めんと漸く承知を 致せし由に岩亀樓の主人も大ひ小悦び 決し夷人の客ハ取せし堅く結し連帯 り名を喜 遊と改めて又全盛 を極めし内



女帝花あかる野辺は宿りせば 何やあくるあくるの名をよめず 遍貼 亞人イルースハ日々夜々に通ひ来て金 惜まず是非とも 喜遊を買んと迫るに 以前の事を忘れハ せぬと怒り眼のくさ みては樓主の威光で 賺し威の勸むれ と喜遊ハ更子受引 ず刃子伏て果さる 辞世 儂の坊帝花 菊もあまるとや 袖ハぬき

岸於竹傳

明治九年の八月、官軍奥羽の諸城を陥し、勢ひ破竹の如く、猪苗代に何無く乘取り、瀧澤峠に押寄せ、同月廿三日の事あり、儲峠より會藩及び脱走の人々、茲を先途と防ぎ、官兵八眼、小餘の大軍を破れ、會兵の猛勇なるも、遂に破れ、これ大砲までも打捨て、迎撃する形状を看るるより、



分割入り向ふ八面、薙立斬立、宛然夜刃の勢ひ、一歩も退ず、戦ひが乱れ、立たる面々、水ハ踏止

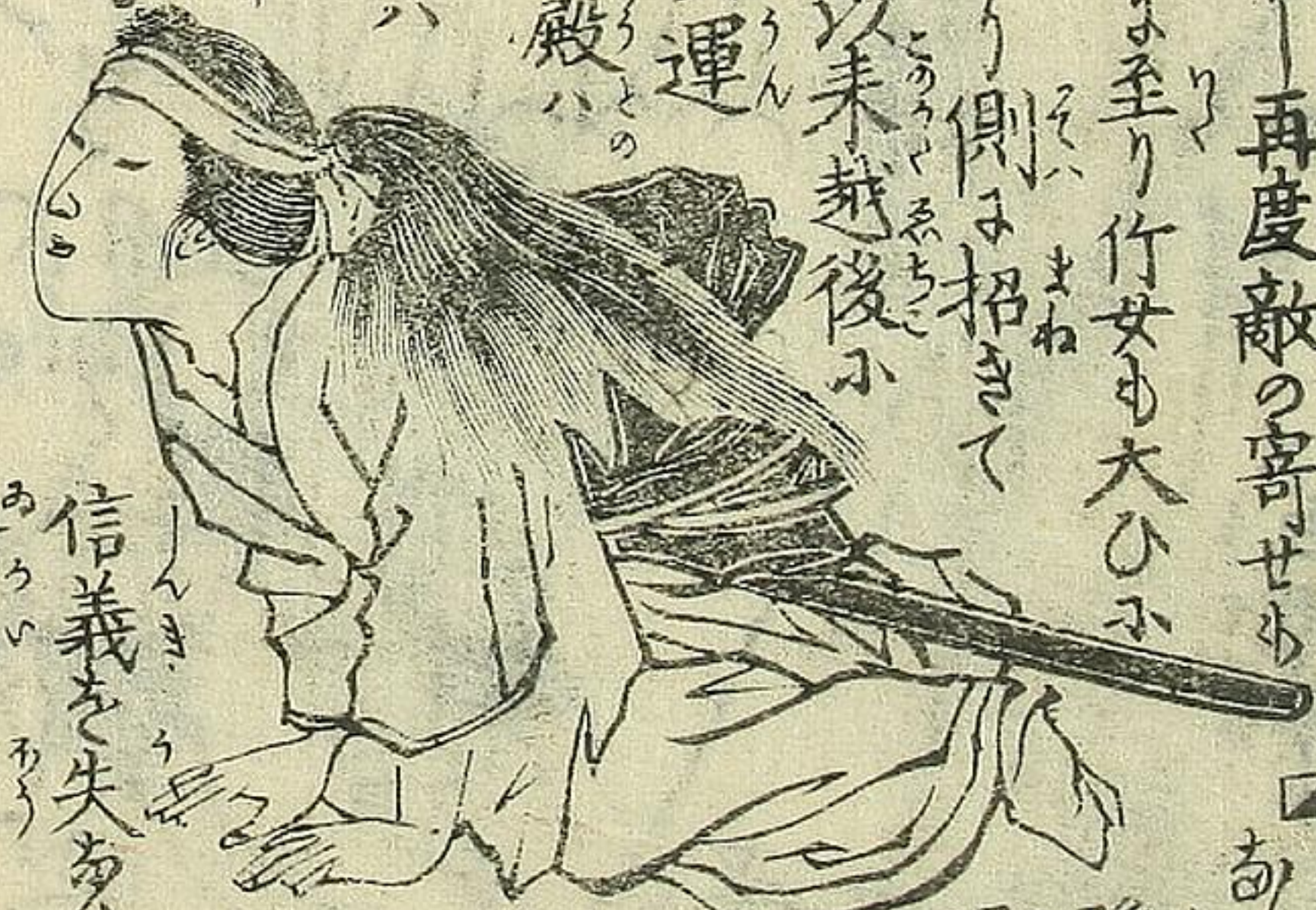


這ハ口惜き、射方の振舞先や、妻が追散さんと、弾藥運送を、倅して居、竹女ハ、武術は秀なり、者也、

疾く群がる、敵の口中へ、毒地、八百瀬某が、引揚乗り、越後口より、辛くも、其場を落、方ハ誘引、更ニ無、お行、由敗れ、一躬、

官兵の屋敷を退退け龍沢峠の敗兵と合し再度敵の寄せぬ
 せ八只一戦小打破んと兵氣の漸く震ふに至り竹女も大ひ小
 悦び在りしが此際百瀬ハ竹女を看るより側を招きて
 挨拶おろり借果しも知る如く六月以来越後小
 在りて数度の戦場小臨めども今日まで運
 強く斯く存生て居る者の貴女の夫七郎殿ハ
 去月十日の戦争小討死されぬせめてハ
 貴女へ紀念の爲と此短刀を禁が所持か
 屍ハ近傍の山に葬りたれど斯くも拙者も
 一命今日までも保ちし也お渡し申す
 時こそ得たり受取れよと差出され
 竹女ハ大ひに驚き始めて聞か夫の

ありと
 豫て風
 聞ハ聞
 諛戦
 場の中
 平常の
 信義を失ふ玉ハす
 遺骸を葬むりたま
 ひのく夫の日頃秘
 藏せし短刀も持



戦死然共聊も憂ある
 体無く代地ふひこと
 腕付百瀬は向つて
 云るや越後
 表の戦争ハ
 毎も激烈
 戦ひ

在る我
 身を取り此上も
 無き歡ひと再三
 短刀を御戴きて受
 収め又も百瀬は云るや
 就てハ夫の戦死せし其場の

帰れお渡し
 様子を御
 存知ある
 妾はお咄
 あれうと
 問ハ
 百瀬も横
 手をこうす
 如何にも
 貴女の言も



如く越後
 表の戦
 争は毎も
 手結の戦ひか
 りが別て其日ハ
 激戦とて七郎殿と
 其ハ一逞兵五百の勢を
 以て陣ヶ峯とて薩長の大
 軍を引受終日官兵を悩め
 一が思ひも寄らぬ横合より敵
 兵不意に攻登り躬方の敗れ
 一其折柄一歩も退す踏止ま

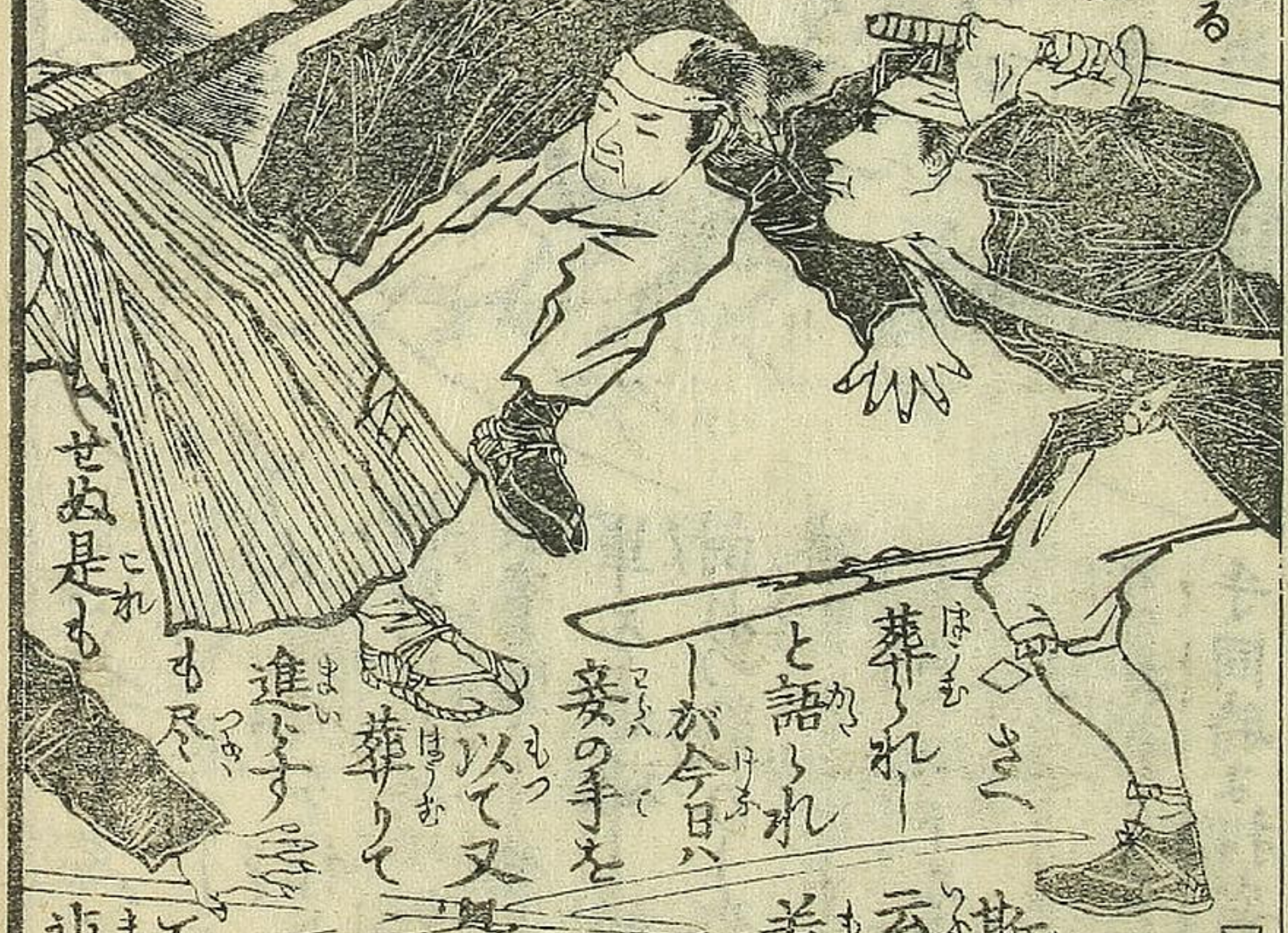
せハ竹女も續ひて馳出―指七日町
 入んとせし折早官兵ハ一の廓
 を兼取て勢ひ破竹の如くあれ共
 城中よりのも撃つて出縦横無盡
 驅立れば 婦女子々追々死を究め
 爰を 先途と防ぎ―由官兵
 の死 傷 入乱れたる接戦
 数刺る及び官
 軍ハ城下を引
 揚たるが又も
 新

り群がり寄する薩兵を即
 座不五人斬倒―尚も進んで
 深入せられ縦横無盡に斬立
 れが弾丸数ヶ所―當る
 を以て遂に 乱軍の中
 で戦死さ
 れ―と其
 大畧を物語
 る此際若松の城下
 小方り大小砲の音響ま―けれ
 する敵も音大りと百瀬ハ兵を
 蛇長も備城下を差―て押出



進ま―遽か
 不鯨波を作りて
 押寄けれ共必死の城
 兵奮激して屢々官
 軍を追返―討つ
 討つ戦ひが遂に
 勝負を決せず―て
 官兵ハ城下を焼拂
 つて引揚―も又翌
 日の拂曉より大手搦
 手同時は押寄天

寧寺山の要害す、早官兵の擡る
 所とあり城中守禦不苦、か
 折柄白川辺小出張せし會兵
 の友又引揚まりて城中の兵
 ハ勇氣を増し又も激烈
 戦ひければ屍ハ累々として
 山を倣し血ハ混々として川の
 如く別て官兵の死傷ハ多
 けれ共新手を以て入替々々
 無二無三小攻立る最
 も激烈接戦中又竹
 女ハ百瀬の戦死せしを



ある
 斯く
 云ふも
 若し萬
 一敵
 の旗
 見
 外見
 是れ
 進す
 母の手を
 以て又
 葬りて
 葬れ
 と語り
 が今日ハ
 せぬ是も

看るよりあ
 刺の勢ひは
 て群がる寄
 手を難立切立
 百瀬の遺骸を脊
 打鐵血路を開いて辛
 も其場を落延たるが兵火
 の為は行先の道を塞ぎが
 必死を究め一事あれは焰の中
 をも潜り抜七日所より裏手
 なる嶮岨山の麓ともて漸く落
 延来りしが其身も手痺をうけ
 悪鬼羅
 因縁



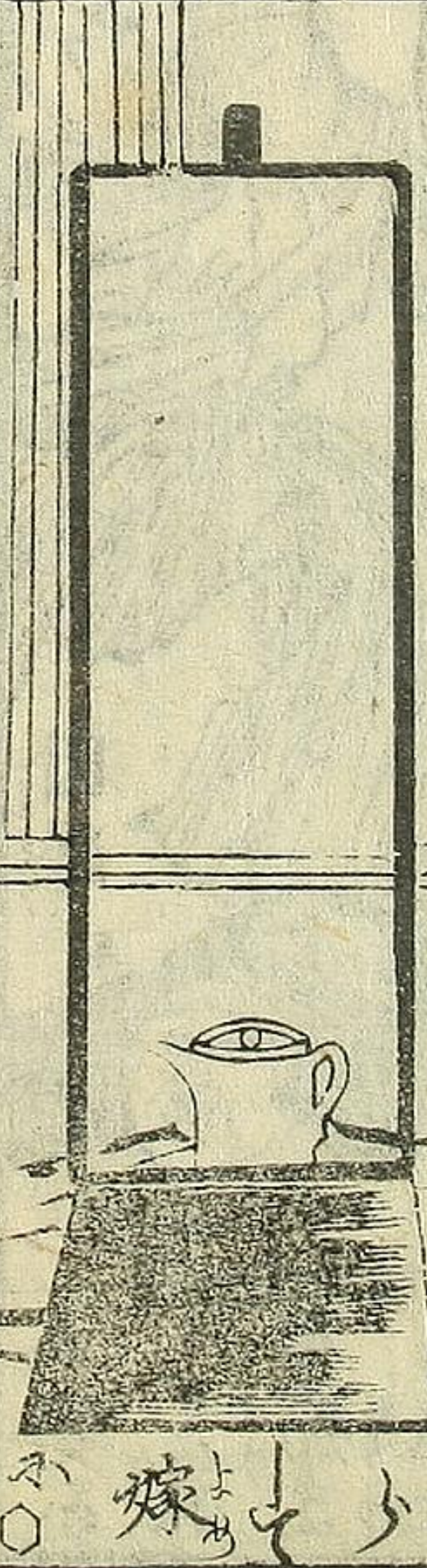
甲斐
 一と氣
 を励ま
 して立上
 百瀬が
 屍を葬
 と其身
 も自害を
 時ハ
 月廿
 六日年二十八辞世
 数ある我身あがも
 亡夫のいささ
 後で名こそ止めん

悪婦於佐喜傳

駿河安部郡府中
 兵服町不荒物渡世
 をする源兵衛といふ
 者あり文化の傾ま
 で土地でも知れ
 身代あり下婢
 家僕との多ひ
 中よりおさねと
 云ふハ容貌も
 美しく平常

○の行ひも至つて正しく其頃
 漸く廿歳るれ共見外も飾
 りも亦棄て朝ハ明輩より
 先ハ起夜いも入り黙火の
 えハ終日の勞れを厭はず
 雇人の衣類申す不及
 羽輩までの裁縫を引受
 其合間のハ讀書を心掛

○怠る俸のあふされハ主
 人も其意を感
 此上あき者と愛し
 心置無く勝手向諸事
 萬端を打任せて居
 忠義娘と評判の
 高と成
 農巨
 るハ付豪
 高の元カ
 嫁



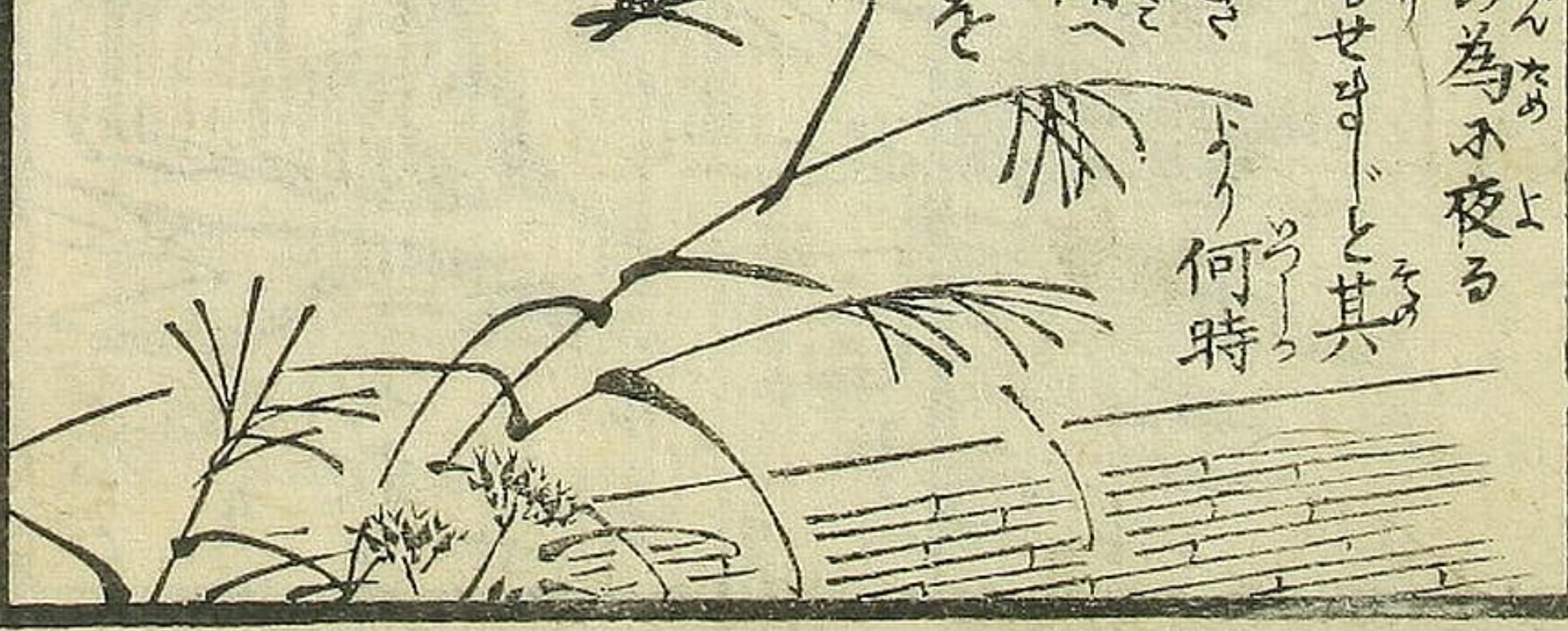
○貫久養女おせんと言込族
 の多ければ主人源兵衛も
 大ハ不悦喜何方ありと望
 みに任せ我引受て縁付んと屢々
 おさね又勸むれと御恩
 報トもせぬ身ハ夜令か勸め在る迎もまづ縫
 針の道さ疎く殊小身分不相應なる御大家
 あり行時ハ却つて此身の分小過れば平小おの
 る下さぬと更ハ縁付念も無く只管主人の為
 のみ小心を尽して仕る内源兵衛ハ風と為た病ガ

果敢か
 此毒
 成り
 尤と
 り
 ち去



おもひが敷き大方をす然るは後相續の
 弥兵衛が代に相成りて災害のみが引續き石
 持の田地も人手不渡一家財も漸次不賣
 代あり打て替つた難渋も長々勤め
 雇人等も何時の程も退く始末廣き
 住居も荒果て以前に替る負も身の
 上今其日の活計さす行難きを目前
 小着るこ付てもおまね心物も張裂く
 且那のお暮も足るもあんと賃繰を
 取りて心不乱茲ぞ御恩の報し時と
 晝夜を別たす縁ぐぬ其賃銀

▲トフキ一由んたあよ
 星霜主人の為不夜る
 さ碌一眠もせずと其
 評判の高き
 政府へ洩聞へ
 御褒美金を
 賜はりし明
 治九年十
 月あり



も勘あうね主人弥兵衛も
 下婢と思ふ嬉涙の
 乾あふ手其手助
 小漸々と弥兵衛
 の活計も取續
 けばおさねハ夫を
 樂みお尚も萬
 事は注意て
 りよ忠義を
 尽一年老ぬ
 れと聊う以前よ
 替り無く長の



森岡於松傳

慶應四代辰の年ハ幕府の諸士方向を誤り
 王師小枕する中に森岡良太郎といふ者ハ小石
 川竹早町小住居せしが官兵
 御東向と聞ゆるも
 江戸を脱
 野所
 走る跡ハ妻のお松の
 心細くも日を送り夫の安否如何か
 と察ト暮せしある日の雪夫が友人
 澤某が来り拙者ハ貴女も知る如く森岡氏



よしお世話を致す私一
 れハ何事ありとも御遠慮を
 御相談をせられよ最
 々敷物語られお松ハ甚
 不審み仮
 今脱走
 する所
 心急
 の斯まで
 他人小頼むあり我
 身小咄しも在るべ

上十二

とハ別々の御懇意殊小先頃良太郎殿當地を
 脱走せしる所ハ諸事
 萬端世話をバ為して達ての御
 依頼夫ハ疾ふも罷り出お世話

を致す苦あるを何方迎も知る如く
 易き心地もせぬ中なれば遂今日まで打過たり
 併し拙者も森岡氏よりお世頼みあり
 かハ及ぶるか今日

盡忠報國



此ハ夢おも知らぬ
 事とつ寫澤とて
 夫ハ左も
 懇意
 の人
 覚
 不察
 女一個と侮
 リて深き巧

みと竟ぬ油断へるど
 疾くも曉り屹度姿を改め
 嵩澤某ふお向ひ私事ハ夫小捨
 りれ便り勘あき身もれども是とよ可き用事も

無殊
 近日實
 家方へ参る
 不存不御座りませれば
 お世話相成る日数もあ
 又貴君ゆも御用のおもさん
 此方うへて罷り出願ひやすと断然言れ

何う願ひの在る時ハ
 を仕裁る大膽者疾く
 言難く光
 陰を送るその
 中ふ己れが情
 慾の壘へ難くや
 ある夜密か
 小忍び行心の
 夫を明すか否
 お松ハ怒地面
 色を替女一
 個と侮り
 不茂



今更あんと詞無く黙然とて居たり
 か嵩澤ハ尚も詞を巧みて云るやう成やど
 実家へ行るハ平常なれば
 よけれ共諸國ハ何れも戦
 争最中夫より當地不止まつて
 氣樂小暮すが第一々々林岡氏とて
 脱走してハ証無事でハ帰れませ
 其様ハ何れ其うすふと心残して

此場を立退もバ穂便ハ
 女下
 此れ武士の
 女房た
 一言小整言
 戒れハ嶋
 澤某と
 うち笑ひ
 それをど
 立流し



望みハ遂る覚悟やれと
 立裁る腕首取て捻返し



ひるむ處を肩み裁天声と俱み投
 出せー其勇力み恐怖
 てや寫釋某ハる
 びごぬ後ふお松
 ハ只一個黙然
 とく居
 たりが
 又熟々と
 考ふれハ夫が脱走致
 せー後ハ諸國の戦争益々激
 しく夫は付ても父母の御身の上も
 心元無く空敷斯てあんどより

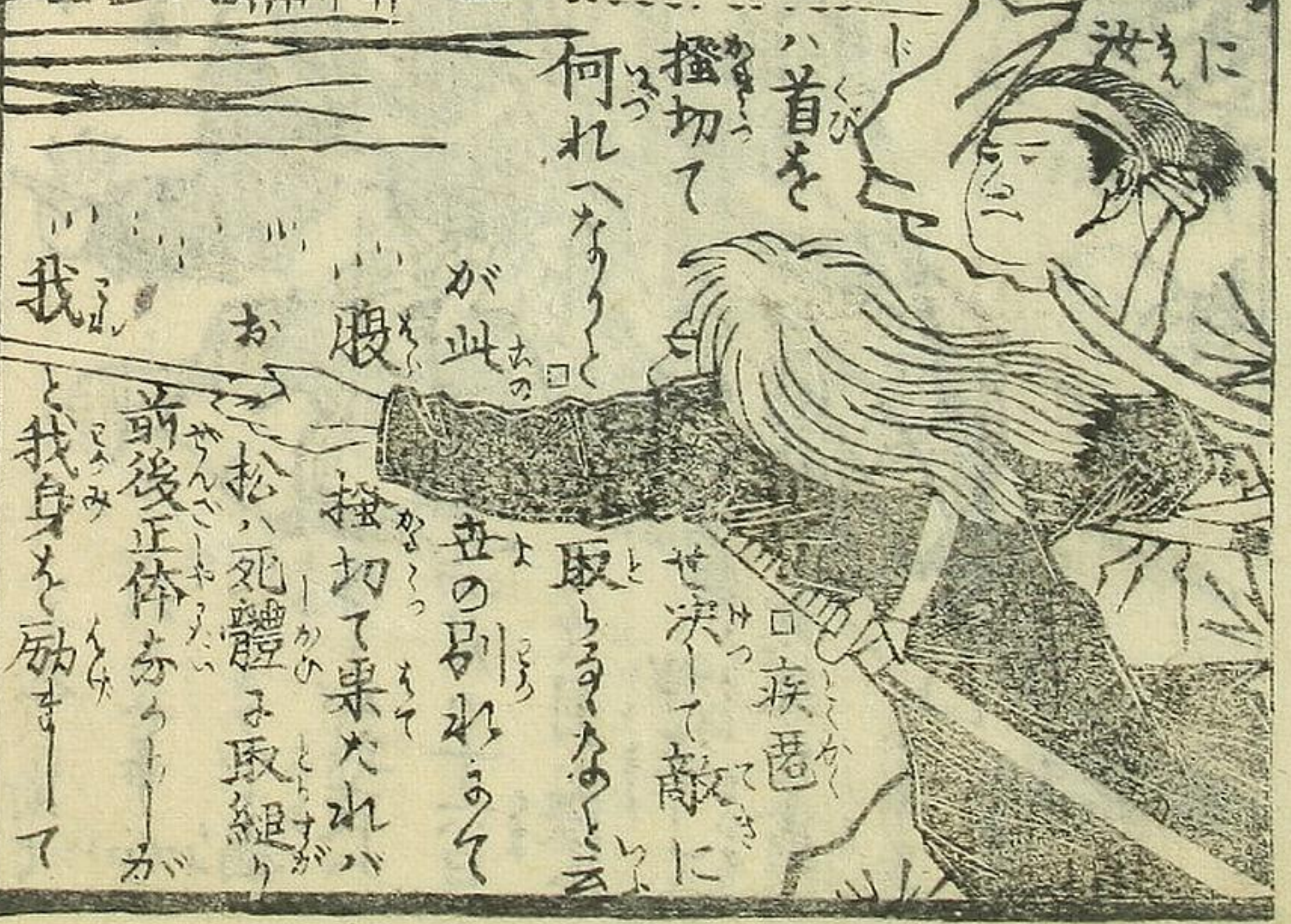
方き分ぬバお松ハ
 望みを失ひも歎み
 ておくれぬ場合であれ
 屹度心を取直せめて
 ハ暫時休息せんと寮内
 知つれる奥の間の旅の勞
 れを休めが早日も暮て
 二更の
 頃雀め
 の宮の方ふ當り大小の砲声
 ハ山をも崩地も裂るかと
 あやもれ遅々砲声の折附



實家の様子を探ねんと家財を片附
 準備の金を肌小付枚戸取もを来りー小
 東西何処と分ぬと遙か不聞
 ゆる砲声小儲ハ實家の近傍
 でも早戦
 ぬれハお松ハいよ
 心も急夜を
 日小継で
 小山驛の在
 なる實家小こ
 そハ着るるが父母ハ
 何れ立退ーや其行

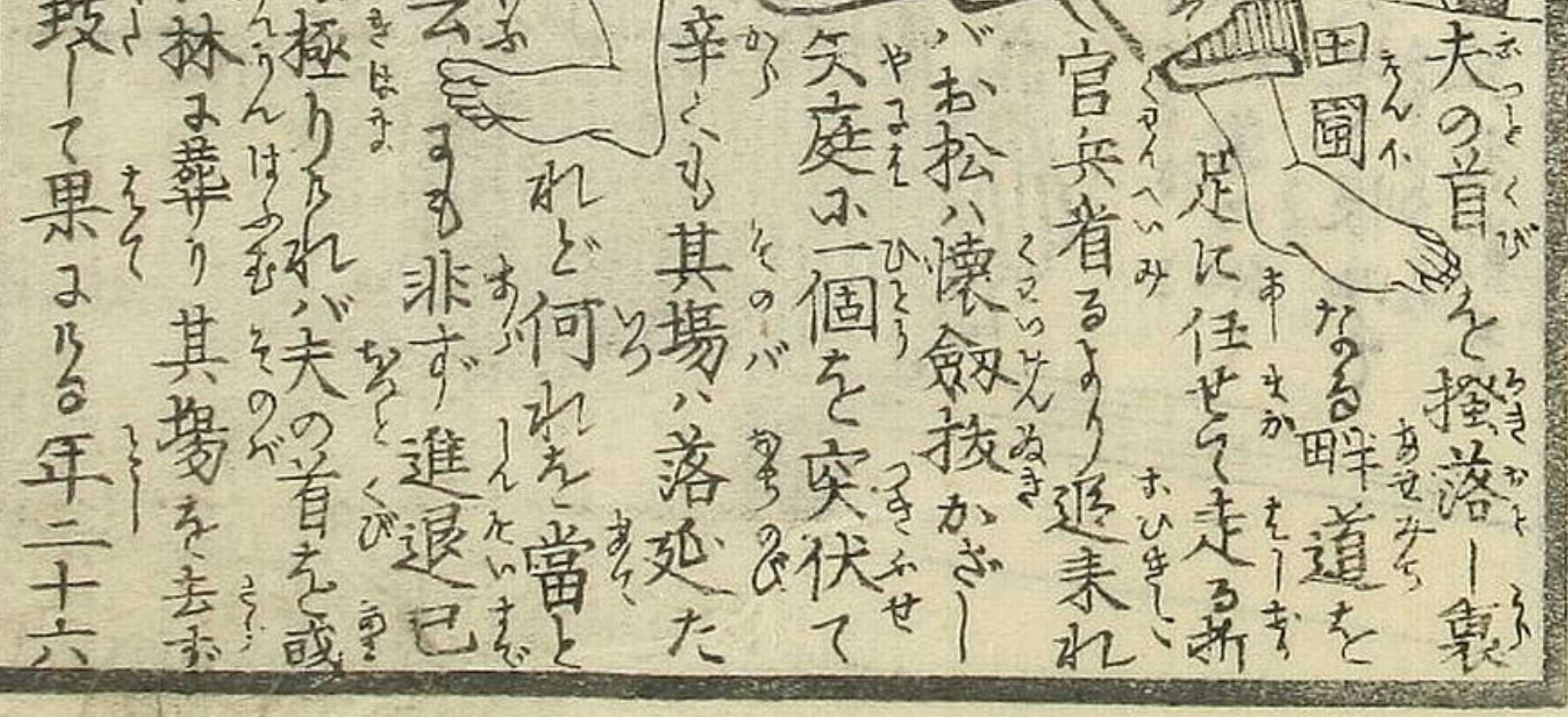
居られもせず如
 何るさんと猶
 豫ハ此夜ハ
 四月の十六日
 ろり月ハ隈
 輝渡りて
 宛然白晝
 事か

此折一個の脱士が深手を負て漸々と刀
 を扶き入来り竹む竹ふお松ハ奥
 より歩行り差込月小透して
 着れ夫森岡良太郎が全幹朱
 漆ふり竹み居たるふお驚き我夫
 なるかと取廻れ思ひも依りぬお松が
 声小良太郎も夢かと計りて又
 其方ハ如何一々此家へ来一と言さ
 も深手小苦一お夫が身の上お松ハ
 不思議の對面を飛立不との嬉一さも
 又悲一お夫が手負有一事共語
 るさ胸も張裂ばくりあり此時



何れへなり
 掻切て
 首を
 疾悪
 取らるるなり云
 世決て敵に
 此の別れありて
 掻切て果大れハ
 松ハ死體を取廻り
 前後正体ありり
 我身を励ま一て

良太郎 妻の向ひ予も又爰へ来り
 一雀の官の戦争敗れ是迄落延来
 れ共詮詰ぬぬ我が深手も一や舅
 の在すある我亡後を
 頼まんと惜まぬ命
 存生て漸くたが
 来り一と
 其大
 嬰口
 物語る折か
 の押寄来一と聞けりも最早遁
 れぬ我運命茲も我死す程



夫の首を掻落し裏
 田圃
 なる野道を
 是に任せ走り折
 官兵着るより返来れ
 お松ハ懐劍抜かば
 矢庭一個を突伏て
 辛くも其場ハ落延た
 れ何れを當と
 云する非進退已
 掻切りし夫の首を成
 投林に葬り其場を去
 自害致して果より年二十六

孝女於伊弉傳

江戸神田佐久間町に刺煙草を渡せしする
 近江屋喜助の娘の容貌の衆不越たるのみか
 孝心深くして父母の教へを守りければ喜助夫婦

宛然狂氣の如く
 天地を恨みて
 泣悲心歎又と



ハ掌この王と愛し親子三個下稼業を励み
 のより何不自由あり身分とあり根病身

此世不我身程
 不幸

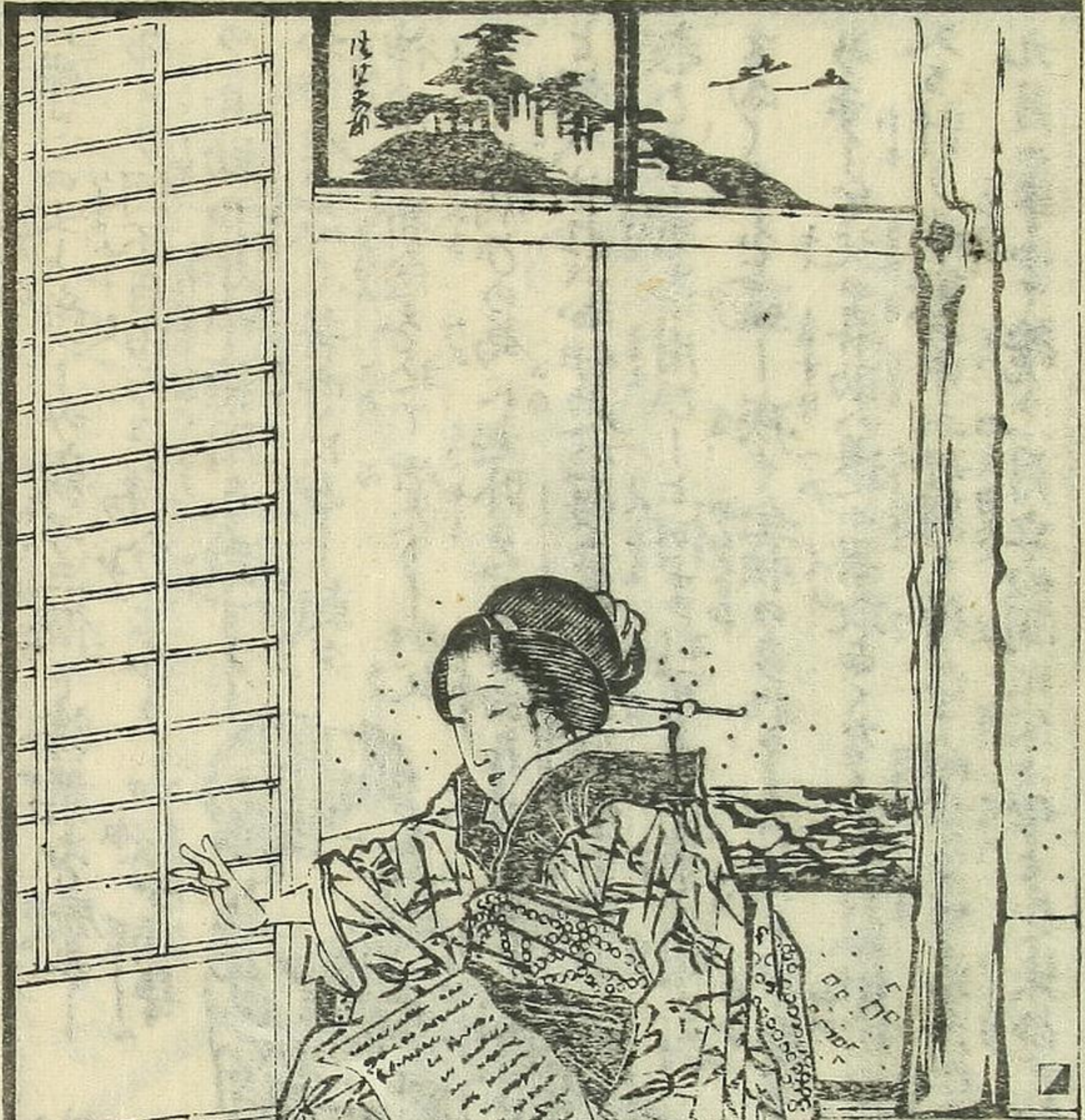
お伊弉ハ深く苦勞にあり朝夕
 神佛に祈念を込て居たりが父
 母侶俱病ひの爲に起臥とも自由あざる身
 と相成ければお伊弉ハ寢食を忘れ名匠を
 撰び良薬を用ひ上何まれ宜より事ハ聞か
 まぬ手盡し疾く全快のまれと祈る甲斐なき
 あまゝして父の喜助ハ遂に果敢あくなけれお伊弉ハ茲不絶
 入る計り悲歎の中不母親も續ひて此世を去りたるハ安政三年
 九月の事なり纒々二月立ぬ間に父と母とを失ひてお伊弉ハ



思ひ迫
 不絶
 致せを刀
 屋清ハ止
 不絶

世話のあつた夏も星霜を送る
 十六歳の暮水戸家の義
 士關鉄之助の外妾となり最貞
 節小仕するゆゑ鉄之助も寵愛して本郷二丁目に
 家作を求め下婢入を附置て何不自由なく暮ら
 せが萬延元年二月中旬鉄之助へ入振りて
 来りしのか其日殊小心配一夜を明して帰りが
 同年三月三日に至り水戸家の浪士が櫻田外で
 井伊中将を討つと其評判お伊通へ驚き

ありし事とハリ重きお方を討た
 れば証罪科八道おれ然バ妾
 も存生て仇の此世を送らんより
 未来の父母不仕えと谷中の普
 提院ま到りて自害す年十八
 辞世花と見し梢まかけ消る身
 東の比叡の春の淡雪



若や思へば氣も半吉
 其処よ此処よ聞合す
 れど知る
 折柄櫻
 田外の
 大騒動一
 伍一什事
 明細と賣
 来りしに
 お伊通へ買取り看れば
 十三人め不関鉄之助と

武田於登喜傳

水戸家の臣武田伊賀守正生
妻あり藩中の婦人多しと
魚も登喜喜ハ尋常の
婦女子と異なり
文武両道
の達一且
容貌の美
其頃衆人の知
る處あり然る元
治年間同藩の姦徒



暴威を振ひ藩内小残り居る正義の士を
悪み究果至らざる
處あり故小正徒
藩主に訴ふんと
三百人水
戸を脱し
下
の小金
幕府
之を知
りて

市川朝比奈等が
正義の族を忌嫌
辱め激論の
末に藤田小四
郎



田丸稻之右衛門
門を始め藩籍を脱
常弱筑波山
ふ籠る又
市川ホ尚也
江戸に
入るを
許さ
此時鎮
撫の
ため
耕雲
齋
正生
藩
主
の正義なるを
忌嫌ひ不意に
了本國小歸り脱士を
入城をせんと論
せに市
川等ハ
耕雲齋
の正義なるを
忌嫌ひ不意に
了本國小歸り脱士を
入城をせんと論
せに市
川等ハ
耕雲齋

暴発 暴挙と唱(な)罪ある体不幕
 一之之を 府へ訴(う)夫而已(ただ)なり
 拒む正生(せいせい)事(こと) 市中(いちぢゆう)に在(あ)る
 を得ず(と)て 武田(たけだ)に在(あ)る
 戦(いくさ)の其後(そのご)退(ひ)く
 那阿(なあ)の 漢(かん)へ揚(あ)る
 又市川(またいちがわ)の 智(ち)を以(も)つて 遂(つい)に 武田(たけだ)を



の家族(かぞ)と此(こ)の
 差(さ)置(お)く其(その)時(とき)ハ如何(いか)なる事(こと)を為(な)すやも知(し)れず
 さあぬ裡(うち)に捕(と)縛(わ)して後(ご)日(ひ)の妨(さまた)げを除(の)くと心(こころ)利(り)たる兵(へい)士(し)を
 撰(えら)び不(ふ)意(い)に武(ぶ)田(だ)の邸(やしき)を最(さい)最(さい)最(さい)重(じゆう)に圍(かこ)まると此(こ)際(さい)登(のぼ)喜(き)女(によ)ハ
 驚(おどろ)く体(てい)を自(みづか)し身(み)早(はや)く身(み)准(ま)備(び)か一(ひと)長(なが)刀(や)小(こ)脇(わき)に抱(かか)ひ
 家(いえ)裡(うち)の男(おとこ)女(め)を従(したが)うて玄(げん)関(かん)先(ま)立(た)出(で)たる其(その)勢(せい)ひに縣(ぐん)兵(へい)も須(す)臆(おそ)る
 ぐんで見(み)へたりたる此(こ)際(さい)登(のぼ)喜(き)女(によ)ハ進(すす)み出(で)討(う)手(て)に向(む)かふ各(おの)々(それぞれ)方(かた)が妾(めかけ)知(し)る
 の婦(め)女(によ)子(こ)に恐(おそ)怖(おそ)御(ご)猶(なほ)豫(よ)あるハ何(なに)事(こと)を疾(はや)く捕(と)め捕(と)めと耻(は)じめられ
 夥(おほ)兵(へい)が群(ぐん)り撰(えら)ぶ其(その)折(せ)柄(がら)隊長(たいさう)長(なが)某(なにか)の進(すす)み出(で)大(おほ)音(ね)あひて言(い)ふやう今(いま)日(ひ)禁(かぎ)を
 始(はじめ)として當(あた)家(か)へ討(う)手(て)に向(む)かひ一(ひと)台(たい)命(めい)止(と)しを得(と)れはなす然(しか)るを自(みづか)し身(み)を
 捕(と)手(て)に抗(かた)せ去(さ)却(か)つて罪(つみ)を増(ま)すか伊(い)賀(が)殿(だん)の為(ため)にも必(かならず)ず悪(あく)く夫(おつと)御(ご)免(めん)
 尋(たづ)常(じょう)に縲(わ)縄(じやう)を受(う)け一旦(いつたん)牢(らう)舎(しゃ)せざる共(とも)幕(まく)府(ふ)の疑(うたが)ひ晴(は)れもせ直(ただ)ちに御(ご)免(めん)

ある必定素より誠義の伊賀殿をれ、忍地嫌疑の解るなき一、笑を御身と
 考るべき後悔為たまふると辞巧み迷けるを欺る水ると公露知る台命
 ありと在るうへ手向ひ徹しと、恐れあり疾を捕縛せられと長刀元刃不投捨
 て縲絏を受て其後、獄舎に在りて真受光陰を送る中も夫の嫌疑、暗れ
 たるか翌日、此身が赦免となり出
 窄ちすめと待甲斐もる
 正生、兵力盡て
 降伏あり重き
 罪科に處せられ時お登
 喜、更あり
 嬰児まで死刑に處せし
 元治二年の三月に、此時お登喜、吾ハ平八也



辞世 兼て牙ハあきし思て山吹の
 花に白く散らかりき

010190530553

駿東

郡

志

書

卷

之

十

西

下

長

成

村

十

十